

文化

老朽化で送水停止 東本願寺の防火用水路

100年以上前、真宗大谷派（東本願寺、京都市下京区）が、琵琶湖疏水から水を引き同寺独自の防火用水路を築いた。今は老朽化で使われておらず、一般的にもほとん

ど知られていないが近年、貴重な遺産として再評価する動きも。水圧だけで稼働した画期的なシステムで、復活を訴える専門家もいる。
(京都支局・谷村卓哉)

貴重な遺産 復活を



一八九七（明治三十）年に完成した「本願寺水道」。大津市から京都市まで琵琶湖の水を送り、水力発電などで京都の近代化を促した琵琶湖疏水（一八九〇年完成）の主任技術者田辺朔郎に東本願寺が設計を依頼した。一七八八年と一八五八年の京都大火、一八三三年の山内火災、一八六四年の蛤御門の変。江戸時代、四度の火災で伽藍を失った反省を踏まえた事業だ。工期は三年。当時の京都府年間予算の20%強、約十四万四千円を投じた。

口径三十センチ、総延長約四・六キロのフランス製鑄鉄管を埋設。疏水から取水し、三条蹴上（同市東山区）の貯水池から毎秒約百リットルを送った。起点・終点の高低差による水圧で

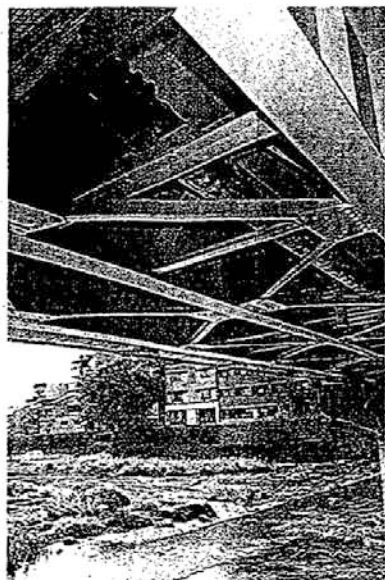
明治の知恵 再評価



完成した本願寺水道を使って行われた「噴水防火大試験」（1897年8月、東本願寺提供）

画期的 水圧だけで稼働

防災や環境教育に活用期待



鴨川を渡る五条大橋の下で本願寺水道の鑄鉄管を見ることが出来る＝京都市東山区で

境を考える市民プロジェクト「幹事の林敏秋さんは「動力に頼らず防災を実現した先人の知恵に驚かされる」と話す。寺域を囲む堀に琵琶湖の水と生物を運んだ本願寺水道を地域防災や環境教育の啓発に活用する活動を続けており、メンバーから保存を訴える声も上がる。

防災システムとして再稼働を訴えるのは、立命館大歴史学部の谷村卓哉氏。谷村氏は「東本願寺が地域と持続的な関係を築く上でも本願寺水道の再評価は有意義と思うが、宗務所内でさえ知る人は少ない。今後の扱いを議論するには、まず関心を高めなければ」と延沢さん。市民プロジェクトの継続はもちろん、学識経験者への聞き取りや境内での埋設管公開など、妙案を模索している。

境内に放水する仕組みで、高さ約四十八層まで水が噴き上がった。御影堂と阿弥陀堂には国内の寺院で初めて、放水銃と延焼防止装置のドレンチャームも備えられたが、大きな火災は完成後なく、一方で施設は老朽化。さびや漏水などによる水圧低下で十分機能しなくなり、約一年前に送水自体を止めた。

本願寺水道に詳しい同派宗務所の延沢栄賢主事は「水は東本願寺の堀や噴水、庭園にも引かれた。親水空間と景観の形成にも役立った」と多面性を指摘。約二十の市民団体などでつくる「東本願寺と環境を考える市民プロジェクト」も、掘り返して管を換えるより現実的だが「数億円では済まないらしい」。京都市文化財保護課も「琵琶湖疏水と並ぶ明治の注目すべき近代化遺産」と高く評価しつつ「文化財に未指定で、行政的な補助は難しい」との立場だ。

大半が地中にあるためか、認知度が低いのも難点。「東本願寺が地域と持続的な関係を築く上でも本願寺水道の再評価は有意義と思うが、宗務所内でさえ知る人は少ない。今後の扱いを議論するには、まず関心を高めなければ」と延沢さん。市民プロジェクトの継続はもちろん、学識経験者への聞き取りや境内での埋設管公開など、妙案を模索している。

「埋設管にポリエチレン管などを挿入する「パイプ・イン・パイプ」で修復できる」と提案するが課題もある。

東本願寺関係者によると、掘り返して管を換えるより現実的だが「数億円では済まないらしい」。京都市文化財保護課も「琵琶湖疏水と並ぶ明治の注目すべき近代化遺産」と高く評価しつつ「文化財に未指定で、行政的な補助は難しい」との立場だ。

都市防災研究センター長の土岐憲三教授。「阪神大震災では神戸から六十キロ以上離れた寺で消火設備が壊れた。近代的な装置ほど地震時の信頼度は低い。疏水を市街地に引張れる本願寺水道を地域防災に使わぬ手はない」と強調。